

「もう かたっぽを さがして 」

ある よく はれた ひの あさ リゼッタは おさんぽに でかけました。
リゼッタは、 あるくと すぐに 1まいの くつしたを つけました。
すてきな みどりの くつしたです。

「ついてるわね。こんなに かわいい くつしたを つけられるなんて め
ったに ないもの。」

と、 リゼッタは ひとりごとを いいました。

リゼッタは くつしたを はいて あるきつづけました。

そのあとすぐ、 リゼッタは ねこの トムと ティムに あいました。

2ひきの きょうだいは、 リゼッタを からかうのが だいすきです。

「みてみて。 こんなものを つけたの！」

リゼッタは とくいげに いいました。

「くつした1まい？ ばかだなあ、リゼッタ。 それなら もうかたっぽは ど
こに あるんだよ？ くつしたは 2まいで 1そくだって しらないのか？」

「ああ、 ほんとだわ。」リゼッタは いいました。

「くつしたは 2まいで 1そくよね。 もう かたっぽも さがさなきゃ。」

リゼッタは 1ばん たかい きに のぼりました。 そこからは なにもか
もが みえます。

でも むだでした。

どれだけ リゼッタが めを おおきく あけても、 くつしたの かげすら
みえません。

「わかったわ！」リゼッタは いいました。

「うみに おっこちちゃったのね！」

リゼッタは きから おりて いそいで うみべへ きました。

リゼッタは つめたい みずの なかに あたまを つっこみました。

さかなが とおりすぎて いきます—もしかしたら リゼッタを てつだっ
て くれるかも しれません。

「こんにちは、 おさかなさん。 あなた、 くつしたを 1まい みたでし
よう？」

「いいや、」さかなは こたえました。

「でも、みてよ。 ぼく、 とっても おおきな コーヒーポットと ちいさな くまでを みつけたんだ。 みずの なかに おちて いる ものって みんな すばらしく ないかい？」

「そうね、」 リゼッタは ためいきを つきながら いいました。

「でも わたしは くつしたを さがしてるの。」

リゼッタは がっかりして、 おうちに かえりました。

「どうして そんなに かなしそうなの？ おちびちゃん。」

おかあさんが ききました。

「くつしたを 1まい みつけたの。」 リゼッタは こたえました。

「でも、 1まいじゃ だめだわ。 くつしたは 2まい そろって いくちゃ。」

「そうね、」 おかあさんは いいました。

「くつしたは 2まいで 1そくだわ。 ちょうど くつみたいだね。 くつしたを あらって あげるから かして ちょうだい。 おそとで みつけた くつしたを はく わけには いかないわ。 きたないもの。」

リゼッタは すわって くつしたが かわくのを まちました。

「あれは きみの ぼうしかい？」

リゼッタは ふりかえりました。 ともだちの パートです。

「ぼうしじゃないわ、 くつしたよ。」リゼッタは パートに おしえました。

「ああ！」 パートは いいました。

「とにかく、 ぼく、 ずっと あんな ぼうしを もってたらなあって おもってたんだ。 かぶって みても いいかな？」

「どうぞ。」

リゼッタは とつぜん わらいはじめました。

「わたしの くつした、 あなたに にあうわね！」

「みてごらん、 これ、 いい ぼうしに なるだろう。」 パートが いいました。

「ええ、 そうね。 もし 2まい あれば、 あなたに 1まい あげるのだけど。」

リゼッタは いいました。

トムと ティムが おうちの まわりを ねこ おとくいの ぬきあしで こそこそ あるいています。

「ピンポン！」ティムが おおごえで よびました。

「ぼくらが みつけた ものを みて ごらん リゼッタ… きみの もうかたっぽの くつしたさ！」

「どこに あったの？」 リゼッタは ききました。

でも、ねこの きょうだいは こたえて くれません。

2ひきは 「ここまで おいで！」と さけびながら かけていきました。

リゼッタと バートは ひっしに おいかけに でていきました。

「ひゃー！ あいつら ちいさいけど ほんとうに はしるのが はやいな。」と トムが いきを きらせながら いいました。

「そうかもな。でも あいつらは ぜったい くつしたを とりもどせないぜ。」 ティムが いいました。

ぽちゃん！

リゼッタと バートが いきを きらせながら やってきました。

「さあ、ほら、わたしたちに くつしたを かえして ちょうだい。」リゼッタが いいました。

「くつしたって なんの ことだい？ もう ぼくらは くつしたなんて もって ないぞ。ほらね？ とんでいっちゃったのさ。」

バートは リゼッタの そでを ひっぱって、

「もういいよ。あいつらは いじわるで、うそつきなんだ。くつしたが とんでいく はず ないもん。」と言いました。

「こんなの ずるいよ！」 リゼッタが いいました。

「もう、2つめの ぼうしは てに はいらないわ。でも もし あなたが かぶって いたいなら、わたしのを もう すこし かぶって いて いいわよ。おうちに ついたら かえして くれるって いうのは どう？」

「やさしいんだね。」バートは とても ちいさな こえで いいました。

おうちに つくと、 おもいがけない ことが ありました。
リゼッタの おかあさんが あたらしい くつしたを 1まい、 あみあげて
いたのです。

それは みどりいろでした。
ちょうど、 あの くつしたの もう かたっぽのようでした。
リゼッタは とびあがって よろこび、 おかあさんを だきしめました。

「バートくんみたいに それを あたまに かぶる つもりなの？」
おかあさんが ききました。
「もちろん。」 リゼッタの めは かがやいて います。
「これで わたしたち ふたりとも ぼうしが あるわ！」
バートは うれしくて おどりだしました。

ねる じかんです。 バートは おうちに かえって いました。
リゼッタは ぼうしを かぶった まま ねる ところです。
リゼッタは ともだちの バートの ことを かんがえて いました。
かれも ぼうしを かぶった まま ねて いる ことでしょう。
リゼッタは ぜったいに そうだろうと おもいました。

でも いちばん しあわせな よるを すごして いるのは あの さかなで
した。
じぶんの ちいさな くまでと おおきな コーヒーポットと そして ぴっ
たりの ねぶくろを みつけて うれしかったのです。

